

7 短節間型ミニトマトの特性と果房の一斉収穫

ねらいと成果

現在、国のプロジェクト研究で育成中の短節間型のミニトマトは果房間の長さが短いために、つるの吊り下ろし作業が省略できるなどの省力化が期待されている。その一方で、果房長も短くなる遺伝子を保有しているために、果実がブドウのような房成り状態となる。さらに、果実の着色が揃うなどの性質も併せ持っている。そこで、果数制限を行うことにより果房内での果実熟度の斉一化を図った結果、「房どりトマト」として一斉収穫が可能で、更なる省力化が期待できる。

内容

短節間型のミニトマト系統「MNBU1」と市販のミニトマト「千果」を4月2日に128穴のセルトレイには種し、7.5cm角ロックウールキューブに移植後、5月10日に定植した。栽培はNFT方式による少量給液循環型システムを用い、養液管理は大塚A処方1/2単位(EC1.2ds/m)を15分/h(am 6:00~pm 6:00)及び夜間2回給液とした。両系統とも各果房を15果に制限する区を設けて果実特性並びに果房内での収穫の斉一化程度を調べた。

その結果、短節間型ミニトマトは、は種30日後の草丈が18cmとなり、対照の「千果」の60%以下と

明らかに短くなった。そのため、収穫果房段数は短節間型ミニトマトが9果房可能であったのに対して、対照品種では6果房で摘心が必要となった。また、葉も小型で、平均果房長も13cmと対照品種の半分以下となり、果房の分枝性も強い傾向であった。果実は対照品種と比べてやや赤味が強く、小玉であるが、糖度は同等以上あり、酸度も高かった。果房あたり15果に制限して、房どりと品質向上を検討したところ、短節間型ミニトマト系統の収量は「千果」と同程度であったが、第2~7果房で一斉収穫が十分可能であった。短節間型ミニトマト系統は果実が熟しても裂果がほとんどなく、さらに果梗のジョイント部分の離層形成がみられないために完熟しても果房から果実が離れなかった。また、果数制限することにより、無摘果区と比べて果重は2g以上、糖度は0.7%増加した。一方、対照の「千果」では15果に制限しても熟すと落果しやすく、裂果率も14%以上となり、一斉収穫は困難であった。

今後の方針

ミニ系統の他、大玉でも短節間系統を国が育成中で、今後、数年後には実用品種の育成が期待できる。

時枝 茂行(農業技セ・園芸部)

表 短節間ミニトマトの特性

	収穫日のばらつき* (日)	第6果房までの丈 (cm)	一果重 (g)	糖度 (%)	酸度 (%)
短節間系統	0.45	83	10.4	9.6	0.42
対照品種(千果)	2.73	125	13.7	9.0	0.24

注)*果房内の果実収穫日の標準誤差の平均値で、値が小さい方がばらつきが少ない。

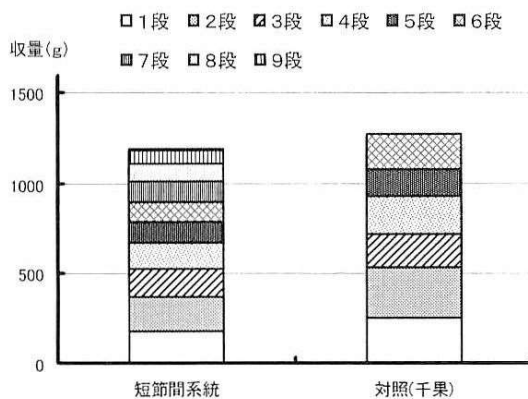


図1 株当たり収量

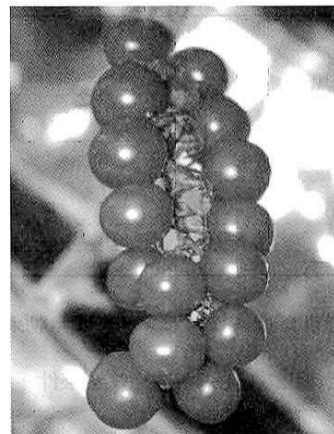


図2 短節間ミニトマト